●春日部市民文化講座（第 35 回）　「茶の湯をめぐる武将たち」

◆日時：2021 年 2 月 24 日(水)　10 時（ぽぽら春日部 4 階会議室）～12 時

■私たちの社会はこれからどうなっていくのか？

今日のお話は、**「茶の湯をめぐる武将たち」**というテーマにある哲学です。所謂下克上というのは何で起きたのか？今、私たちが暮らしている社会はいったいこれからどうなっていくのということを考えていきたいと思います。

平蜘蛛を割る松永久秀。落合芳幾画

■茶の湯をめぐる武将たち／松永久秀

下克上の中で、皆さんが名前を挙げられる武将は誰ですか？　難しいですよね。ぼくが研究してきた中で、最初に名を挙げるとすると、トップを走った人はまずこの人、**松永久秀**です。先日終わった NHK の大河ドラマでも何度が出てきましたね。この人は武将としての名もありますが、文化人としてなかなかの人物で、足利文化の影響を受けて育った人です。この人も堺の商人たちと繋がり、利休さんとも最初は鉄砲の関係で繋がりました。利休さんの最初は武器商人でしたからね。種子島に鉄砲が伝来するとすぐに日本でも鉄砲が作られ、伝来したものよりも良い銃が造られたのです。そうした鉄砲を製造して大名たちに商っていたのが、堺の商人たちだったのですね。その中に千利休もいたのです。そういう中で、松永久秀が足利の文化を愛して、茶の湯を楽しんでいました。茶人という言葉がなかった時代では「好き者」といわれていて、茶の湯を好む人だったのです。この人の茶の湯にかかわる有名な話は、**「平蜘蛛釜（ひらぐもがま）」**です。一見すると蜘蛛の形に見えるという釜です。この人が死ぬときに壊してしまったので現存するものはありませんが、名器だったと言われています。何故壊したかというと、織田信長が欲しいと言っていたので、信長の手に渡すくらいなら壊したほうがいいと言って、死ぬときに釜を壊したと伝えられています。そういう点でも魅力がありますね。

■本当は悪人では無かった松永久秀

朝日新聞の 2 月 22 日の記事によると、天理大学准教授の天野忠幸さんが良く松永久秀のことを調べられていて、これまで松永久秀が「将軍を殺し、主君を殺し、東大寺大仏殿を焼いた極悪非道の人物だ」と言われていたのは嘘で、江戸時代になって脚色されたものだと言っているのです。歴史は、ぼくらが習っていたことが、後になってひっくり返されたことが何度もあり、新証拠が出てくると覆されて嘘だとなってしまうのです。ここでは、久秀は主君だった三好義興（長慶の子）も、足利義輝も殺しておらず、大仏殿焼失も東大寺に陣取る敵を攻撃したときに延焼したものであるとしていますし、足利義昭を擁して信長が上洛した時にも久秀が大きな役割を果たしていたとしています。信貴山城で久秀が「平蜘蛛」茶釜を抱えて爆死したというのも、『信長公記』には「天主に火を懸け焼死」とあるだけで爆死とは書かれておらず、「爆死」という記述は江戸時代になってから創作されたと言われているのです。そういうふうに見ていくと、松永久秀という人は、**下克上の時代の中で武将として文化的に開放的な考え方を持っていた人で、室町文化を継承した一人者としてリードした人だ**と思います。ただ、最後は信長に逆らって命を落とした人です。

「太平記英雄伝　廿七　荒儀摂津守村重」歌川国芳筆　嘉永元年-2 年（1848-49 年）頃

■茶の湯をめぐる武将たち／荒木村重

次に、下克上の時代の中で有名な武将として**荒木村重**がいます。この人も信長に逆らって城を囲まれるのですが、寸前のところで逃げて命拾いした人です。この荒木村重という人もすごく魅力的な人です。たぶん戦国時代の中で、文化的に最先端を行っていた人は松永久秀であり、この荒木村重であったと思います。この人は、千利休の弟子ですし、高山右近を茶の湯に導き、千利休に引き合わせたのが荒木村重だと推察されます。ここは状況証拠がありません。ところが、信長に背いて毛利氏に逃げ延びるのですが、そこでは道糞（どうふん）と名乗っていたのですね。文化人でしたから毛利でも茶の湯などをやっていたのでしょうね。本能寺の変が起きて信長が亡くなり、秀吉の天下になると、秀吉はもったいない人物だということで堺に戻し、御伽衆に加えて秀吉のブレインとして働くことになります。この時に道糞では良くないので道薫（どうくん）と改名するのです。この人は数機の運命を

辿るのですが、これは下克上でなければ起きないようなことを経験した人だと思います。でも、この人の謀反によって高山一族は大変な犠牲を払いましたね。特に、村重の謀反によって高山右近は幼い時からの親友であった和田惟長（これなが）という人を傷つけてしまい、それがもとで右近の竹馬の友が死んでしまうのです。これは、現在カトリック教会で高山右近を「福者」として立派な信仰者としての模範を遺した人としていますが、ぼくは本の中で、高山右近にとって大きなトラウマになっていたのではないかと書いています。高山右近の研究者でカトリックの方は、その点を評価してくださっています。本当に仲の良かった友と命を狙い合い斬り合うのですよ。それが下克上の時代だったのですね。そして、和田惟長が死んだことによって高山右近が高槻城の城主になるのですから皮肉でもあります。そのきっかけを作ったのが荒木村重なのです。

■本阿弥光悦

信長とさまざまな武将たちによる混乱が収まり始めた頃に出てくるのが**本阿弥光悦**です。この人のことをぼくは、刀剣の鑑定・研磨師、歌人、当時の 3 書家に入る文化人だということは知っていたけれども、茶碗はなかなか気が付かなかったです。彼の造った 20 個くらいの茶碗が今でもずうっと陶芸のトップにあるのです。ですから、陶器師のトップがこの人だと言えますね。この本阿弥光悦は、茶の湯では**古田織部**を師としています。そして、**織田有楽斎**とも親しく関わっているのです。これは不思議な関係ですね。さらに徳川家康とも関係が深く、現在、京都洛北鷹峯に表千家の宗匠が代々住職を務める光悦寺がありますが、この鷹峯の土地を家康から拝領しているのです。この本阿弥光悦は、下克上で武士が戦をしている中で、彼は職人として刀を研ぎ、芸術の世界で活躍していたのですね。彼にはこんなエピソードもあります。ある時、名も無い名刀に出会うのですが、それをしっかりと研ぎ、武士に譲ります。その時に決して高い金額ではなく、自分が手に入れた金額に研ぎ代だけを載せて売ったというのです。彼は金儲けをするのではなく無欲だったのです。彼には損得勘定が無かったのですが、その教育は母親がしました。彼には自分の**心の規則・律**があって、決してその規則・律を曲げることはしなかったのです。皆さんは、自分が絶対に曲げない、妥協しないという律は持っていますか？　これは大切なことです。昔は「良心に恥じないことをするな」とよく言われたものですが、今では死語になっていませんか。もう一つ死語になっているのが**「清貧」**です。今日、ここに持ってきたのは中野孝次さんという国学院大学の先生が 30 年前に書かれた『清貧の思想』（草思社、1992 年刊）という本です。この本の中で、著者が「私が尊敬する清貧の思想の第一人者は本阿弥光悦だ」と書いているのですよ。そして本阿弥光悦とその家族が取り上げられているのです。

■「清貧」と侘び茶

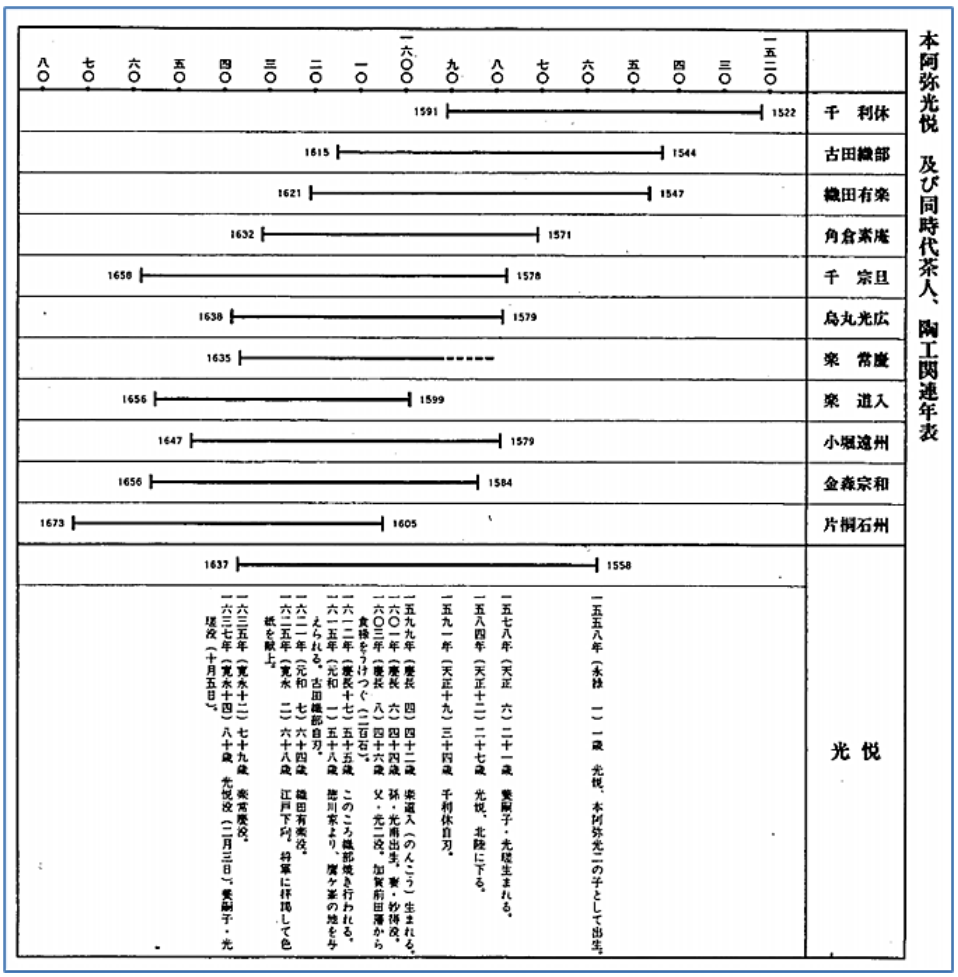
「清貧」という言葉も今では使われないでしょうね。ぼくは 16 歳で洗礼を受けて、その頃に「清貧」という言葉を聞きました。それは、清教徒といって1620年にイギリスの国教会を追い出されて、メイフラワー号に乗ってアメリカに渡った 102 名の人たちのことを指すのですが、清く貧しく美しくを律としている人たちだったのです。人は月や星を観て、冷たい空気に触れた時に感動し、美しさを感じ、自然界の貴さに感謝する心がでてきます。彼らは、そういう生活を子どもの頃から続けていた人たちでした。当時のイギリスでは産業革命が起こり、貧富による差別が横行し始めた頃です。教会学校というのがありますが、貧しくて学ぶことができない、食べることもできないという子どもたちに教育を行うために教会で授業をすることを始めたのですね。そういうグループがイギリスを追い出されてアメリカに渡ったのです。ぼくは仏教徒です、神道ですとおっしゃるかもしれませんが、その方の宗教の哲学、律がその方の生き方になんの影響も与えていないのです。生きること、死ぬことに何の影響も与えていないのですね。我々の生きる上での最大の関心事は損か得か、早いか遅いか、儲かるか儲からないかになってしまっているのです。これは悲しいですよね。そういう中で、利休さんの「詫び」という思想・哲学にシビレたのが**本阿弥光悦**でした。本阿弥光悦を表現する言葉として、ぼくは**「簡素、清貧」**としました。資料の巻末に「本阿弥光悦及び同時代の茶人、陶工関連年表」を付けましたが、お付き合いしていた人が分かります。これを見ると、1591 年に千利休の自刃がした頃、光悦は 38 歳で北陸にいました。そして、1612 年、このころに織部焼きが行われ、1615 年、光悦 58 歳で、徳川家より鷹峯の地を与えられ、古田織部が自刃した頃に、光悦が茶碗を焼き始めたと言われているのです。だから茶の湯には関心があったのでしょうが、刀研ぎで職人としての技を磨き、書道で文化人としての感性を発揮していたのでしょうが、陶器師として茶碗は造っていなかったのですね。中年を過ぎてから茶碗を造り始めているのですね。

■本阿弥光悦の茶碗

何で光悦はこういう茶碗を造ったのかというのが、私の今日の話に繋がっているのです。光悦の茶碗は、長次郎の茶碗とも違い、**残っている 20 個の茶碗は削いで削いで削ぎきった茶碗で、**これ以上削いで捨てたらただの土というところまで削ぎきっています。今日、ぼくが持ってきた茶碗は、光悦の赤楽に近い茶碗です。こうした造形ができる哲学は何かというと**「清貧」**なのです。ですから、「清貧」というのは欲に溺れないことなのです。「欲がはらむと罪を

生み、罪が熟すると死を生みます」(ヤコブ 115)という聖書の言葉がありますが、我々の社会で心に律がなければ罪が増大します。不道徳が拡がり、インチキ、でたらめ、嘘が分からなくなっていきます。今、この街の牧師として、その兆候があるとぼくは見ています。そうなると、罪が熟した後には死しかなくなってしまうのですね。それに反して、欲をいかに捨てていくかということが本阿弥光悦の生きるか死ぬかという戦いであった訳です。ここまでで、松永久秀、荒

本阿弥光悦作、銘「乙御前」



木村重、本阿弥光悦という 3 人について話をしてまいりましたが、最初の二人の武将は欲の塊でもあります。彼らの欲というのは、如何に自分の城を造り、そして権力を持ち城を守るかというために戦うことで、自分の欲望の極みを城に求めた人たちです。下克上の中で自分が下から上にのし上がって城を持つと、自分好みに城の名前を変えているのです。それが下克上の時代のやり手の武士のやり口ですね。今だったらどうでしょうか、諸悪の根源である金でしょうか。本阿弥光悦は職人だから、権力や金を欲していませんでした。技そのものの善し悪ししか彼は見ていないのです。それが彼の茶碗の魅力です。ですから、誰々の作品だからいくらだとか、銘柄だからいくらという値段というのは意味がないのじゃないですか。今の権威とか権力というのは、レッテルと金によってつくられていますね。それは寂しいことです、その寂しさを味わうのは本人自身なのですからね。

■茶の湯の工夫／躙り口、露地

天正 10 年に本能寺の変があり、室町時代までに集められた唐物など名物が一夜にして焼失してしまいます。そして、その頃から千利休の茶が変わり始め、**「りくうの茶」と呼ばれる「侘び茶」**が完成に向かいます。その最初が**「躙り口」**です。小さくかがんでにじってやっと一人入れるような入口が設けられます。これは利休さんの発明ですね。このアイデアは何からきているかというと諸説在るのですが、ぼくは前々から**「これはイエス様の狭き門だ」**と言っていますが、この街の人たちは笑っていました。でも、この狭き門はぴったりなのですよ。この「躙り口」は何処に造るかというと、四畳半以下の茶室なのです。狭苦しい空間に入っていくときに、利休さんは狭苦しくてやっと自分が通れる出入り口を造ったのです。　そして、その狭苦しい空間の中で、回し飲みをしたのです。回し飲みというのは後の時代の言葉で、当時はお茶を吸ったので**「吸茶（すいちゃ）」**と呼ばれていました。このことによって、書院と言われる八畳間以上のハレの間を止めて、**「囲い」**と呼ばれる狭苦しい茶室へと大きな変化を与えました。それが利休の茶の「りくうの茶」たる所以なのです。書院のもてなしを止めたのです。次に茶室に行くまでに**「露地」**を造りました。露地には蹲踞（つくばい）があり、隣りには燈籠が置かれています。火と水が一体となったものなのです。火だけではだめで、水だけでもダメなのです。これが一体となって初めて露地になるのです。茶の湯にあった燈籠であり、蹲踞

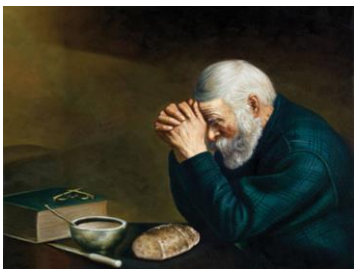
が必要になるのです。これは清めの場なのです。露地には**「飛び石」**が大切なのです。実は飛び石では一人でしか歩けないのです。これはぼくたちの生き死になのです。死ぬときには一人でしか歩んでいくことができないのです。それを利休さんはおもてなしの道筋としたのです。こういう哲学に、我も我もとお城を取ろうとしていた人たちもシビレたのですよ。

■茶の湯の工夫／点前、主客

利休さんによる茶席での工夫としては、点前の理念として**「無言」**が挙げられます。ぼくのようにぺらぺらと話すのはダメですね。最近、ぼくたちの茶会で「髙橋牧師の話が面白いから来ました」というのはお茶の邪道ですよね。茶席では黙って飲んで、黙って帰ればいいんですよ。道具なんて褒めないほうがいいんですよ。亭主のほうから「これは誰々の道具で」なんていうのはダメですね。お客様から聞かれるまでは言わないのです。聞かれたら言わなければダメですよ。大切なのは、**「点前」とは裸の自分と向き合っているかということなのです。「露地」というのは、裸になるという意味ですからね。自分をさらけ出しておもてなしをするという意味ですから、そこには虚飾がないのです。自分に嘘をつかないおもてなしをすることが「侘び茶」なのです**。そして、小さな部屋になりましたから、所作も変わりましたし、道具が変わり、人数にも制限があるようになりました。そして、「客は亭主の点前に注目する」のです。それまでの室町時代までは、茶立人（ちゃたてにん）という使用人がいて茶を点てていたのです。雇われたプロが茶を点てていたのですが、今度は招いた本人がお客様の前でお茶を点てるように変わったのです。それまでは水屋という裏方の道具や点前を、ハレの場に持ちだして見せるようになったのです。それも狭い所で自分自身を赤裸々にして「どうぞ」とおもてなしするようにしたのです。これを「侘び茶」というのですよ。虚飾を取り去ったものなのです。

■茶人の姿

「茶人の姿」というのは変なタイトルですが、ある時、利休さんが蒲生氏郷と細川忠興（三斎）を茶会にお招きしたのです。三畳の茶室だと思うのですが、この時に高山右近は招かれてもいないのに、自分も仲間に入れてほしいと千利休の茶室を訪ねるのですね、そして利休さんが出てくるまでずっと玄関にいるのです。しかもハレの場に相応しくない普段着で来て茶会に混ぜてほしいというのですね。対応に出た利休さんは茶席に戻って、先客二人を下座にずらして、高山右近を正客に座らせようとするのです。本来であれば、高山右近のほうが二人に比べると身分が低く、しかも普段着できているのですが、利休さんは高山右近の茶会に出席したいと**いう率直さと、あるがままの姿、虚飾のない姿を善しとして、今日の茶会に相応しい正客だと判断した**という逸話が残っているのです。皆さんはどう思いますか？　要するに千利休のお茶会では、素っ裸であること、虚飾のない姿であることがハレなのです。でも、ぼくたちは素っ裸になれずに、いつも隠そう隠そうとしているのですよ。それは本当の姿が醜過ぎるからなのだと思います。本当のものが見せられない。そればダメなのです。ですから、利休さんはハレとケというものの区別というものを明確に心の律として持っていましたね。



■今に生きる人々へ

さて、今日の最後の話になりますが、このコロナウィルス終息後の侘び茶というものがどうなるのかということです。今、三千家のお家元のところでも1年近くお茶会がされていません。そんな中で、今後、どのようなお茶会が開かれるのでしょうか？　ぼくの教会には階段の上に振り返らないと見えないのですが、1 枚の絵が飾ってあるのです。その絵は、机の上に堅いパンと一碗のスープと清教徒が使った聖書が載っていて、老人が食事の前に手を組んで祈りをしている場面なのですが、その題名が**グレース（grace、恩寵）**と言い、神の恵が溢れているという意味のタイトルなのです。ぼくは、階段の上にさりげなく飾っています。これこそが**「清貧」**という言葉を見事に描いた絵だと思うのです。堅いパンと一杯のスープしかないのですが、それでも有り難いなぁと神様に感謝して祈る老人の絵なのです。これは、今の春日部の社会と全く違った美意識であり価値観です。この老人の祈りにも似た、ぼくのとっておきの話をします。ぼくは戦後、焼け野原の池袋に母と一緒に安曇野から出てきました。それは小学校 4 年生の時でした。母は、駅前の夜店でハトロン紙に包まれた 20 粒くらいのピーナッツをぼくのために買ってくれました。それは一口で頬張れるような量でしたが、ぼくはもったいなくて食べられなかったのです。そして、家に帰ってそのピーナッツを自分の前に全部広げて、1粒を左右の実と芽の部分との3つに分けて、その 1 つひとつを口に入れて時間をかけてゆっくりと味わいました。その時の有り難い 1 粒 1 粒の味が、ずっと私の心に刻まれていて今でも思い出すことがあります。**そういう有り難い、もったいないという価値観が今の春日部から消えていないでしょうか？**　それを今日、戦国時代の下克上の只中にあった人たちは何を感じて、利休さんが発明した「侘び茶」に心が向かっていったのかということを話したかったのです。

髙橋先生の原風景を聴かせていただき、**「清貧」**という言葉の意味が身近に感じられました。感動！